

一年生もずいぶんとおとなになった。後半に集中して出てくる漢字や片かなの学習にも意欲をわかせる。「きのう、音おさん（おとうさん）が……」などと作文に書いてすましている。

早生れで、ひらがなの習得がちょっと遅れていたK君も、今は簡単なひらがな文はつづれるようになってきたのだが、漢字はまだどうもサマにならない。そのK君「天」という漢字が出てき

た時、「先生、ぼく書けるよ。書けるよ」と言っ先手を挙げた。指名されたK君、つかつかと前に出てきて真新しいチョークをつかむや、大きな声で「てん」と言いながら黒板の真ん中に力いっぱい点を打った。意表をつかれた私の顔をみて、ニヤリと彼。他の子どもたちにもこのユ

ーモアは通じて、爆笑と拍手のなかを彼は意気揚々と席に帰った

二十年ほど前に、私が『新潟日報』「教師の目」欄に寄稿していた頃の一文である。

つい先日、研究所からの帰り、電車を降りて駅舎を出たら外は小雨で

K君との邂こう

片岡 弘

歩道を覆っている。急いでそこに駆け込んだ。家まではあと二百米ほどである。一息ついて、ままよとばかりに走りだそうとしたとき、給油を終えて出てきた車が私の行く手を遮るようにして止まった。

「先生、俺だ。送るよ」

下ろした窓から覗かせた顔は、まぎれもなくK君であった。高校生頃の何回か駅で見かけたことがあったが、多分それ以来の邂こうである。「どっちも先生の家の前を通るから」というので助手席に乗り込んだ。赤信号のおかげで、それでも三、四分間くらいの会話はできたろうか。私立の大学を出て、今は高崎の会社に勤めており、秋には結婚するという。別れ際に、「式には先生にもきてもらいたいな」とも言った。招待状の届くのが今から心待ちである。

あった。家までは徒歩で六、七分だからタクシーに乗るまでのこともないと思ひ、電車のなかで読んだきた夕刊紙を頭上に掲げて歩きだしたが結構雨足は強くて、濡れた新聞紙を伝って雨水が滴り落ちる。

農協が経営するガソリンスタンドがあつて、そこだけはアーケードが

（研究所所員）